

地域からひろがる

「さいたま高齢者協同組合」

川地 素 睿 (東京都/センター事業団東関東事業本部)

昨年9月7日「さいたま高齢者協同組合設立準備のつどい」を、4人のパネラーと参加者の熱心な討論と熱い期待の拍手の中で終えた夜、埼玉の地図を開いて途方にくれたのは人口680万、92市町村という埼玉の大きさだった。「病院で死ぬということ」の上映運動で10ヶ所、2000名の方が参加してくれたが、新聞に掲載されて以降の問い合わせは(100件余あった)、ほとんどが初めて話をする人ばかりであった。後でふりかえってみると、この問い合わせリストから中心メンバーがうまれる貴重なりストになったが…。

ともかくにも、問い合わせのあった方に来てもらおうと第1回の懇談会をもったのが10月。50余名の参加で資料も足りないぐらいだった。そこで確認したことは、①お互いの顔がみえる協同組合にしたい。②言いたいことは言い合い、できる所からはじめよう。③いいだしっぺが、まずはじめよう。ということにした。

はじめのうちの懇談会は開く毎に、参加者が毎回来ている人と新しい人とが混在し、高齢者は何かから説明することになり、「毎回、同じ話だ。次へすすもう」と不満の声も聞かれはじめた時、頭に浮んだのは東京の経験を生かして「地域センター」を軸にして活動をひろげることだった。電車のルートが不便だ、生活圏がちがう等の声に、手なおしをし、最終的にいくつかの行政区にまたがる地域センターを設定し、すすんだ地域が参加者の少ない地域とも一緒に活動することにした。「仕事も、人も、運動も」地域センターがやることを提案して以降、設立へ向けての取組が大きく拡がったように思う。長い人生の経験をもたれた



4・12設立総会
見沼太鼓

方の行動は、思い切りがよく大胆だ—何度もそう思われた。

峰岸壮吉さんは、入間市に引越して1年に満たない。「市のボランティア活動には参加していたが、地域の事はほとんど知らなかった」という。地域センターの準備会には欠かさず参加してきたので、「自分が何ができるか、地域の人に高齢協をまず知らせたい」とシンポジウムを企画、たった一人で会場を押さえてしまった。ついでなら市長にも来てほしいと企画書をつくり、福祉課に何度も通い、ついに市長と永戸連合会理事長との懇談、シンポへの市長あいさつを実現してしまった。当日はTVの取材もあり、50余名の方が参加。初めて見る顔ばかりだった。「80名にはしたかった」と峰岸さんは、ちょっと不満気だが、一人でも、できることをした意味は大きい。

さいたままでの特徴でもあり、これからも引き続いていく「市長懇談」を実現したのも、そのほとんどが地域の人が道を開いたものである。そもそもは2月3日、雪の消え残る狭山市の町田市長を、地元の中川市議の紹介で訪ねたのが最初である。30分位の予定が2時間を超す懇談になり、永戸理事長も町田市長も大いに語り合うことができ



4・11市長との懇談
春日部市長(前列中央右)

た。中川市議は設立当日も39度近い熱をおして参加してくれた。狭山に引き続き、入間、飯能、所沢、大宮、浦和、与野、春日部の各市長との懇談が実現した。ほとんどが、自主的にやられていることはすごい。これからも協力したい」と好感をよせてくれているので、所沢では消防署跡地を高齢者と障害者のセンターに借してほしい、春日部では小学校の空教室を学童と高齢者のたまり場に借してほしいと要請した。近日中に再度企画書を持参し話し合う予定だ。市長懇談は引きつづき20市を予定していて、高齢協組合員がいる全ての市でやろうと話合っている。

二つ目の特徴は、労協と高齢協が一緒になって仕事をはじめようとしていることだ。きっかけになったのは、2月1日労協のブロック集會に高齢協の5名が参加したことだ。現場の現実の姿をありのまま見てもらった。高齢協を支える労協が地域に根づくことは、仕事を増やし、自己変革を遂げることだ。

高齢協の組合員の情報は早い。村西さんは自分の仕事(介護用品の販売)を通じて、老建設の建設準備から「労協」を紹介してくれ、現在2ヶ所の病院から見積りを依頼されている。団地の建て替えにともなうリフォームの仕事を建設労協と高齢協で、と安藤さんと提案を検討中だ。個人住宅の改造も建設労協でやることに決まりそうだ。お互いの得意な力を出し合い、事業を一緒にする中で、お互いが学びあい助けあうことを大切にしたい。

三つ目の特徴は、「地域」ということと、「顔のみえる協同組合」にこだわったことだ。「さい

たま高齢協」は、来年の4月12日までには組合員目標を1000名においている。地域センターでは50～200名の組合員がいることになる。「顔がみえる」ために、できるだけ多くの人の意思が生かせる直接民主主義でありたい。だから数に制限を設けない運営委員を地域センターから選出することにした。理事会の構成も、準備の中心になってきた人たちがほとんどだ。月一回の理事会も「理事、運営委員会」として誰でもが参加できるようにする。

もう一つの特徴は、はじめから仲間づくりと仕事づくりを二本の柱にしてきたことだ。

設立当日の4月12日は、午前中が「仕事づくり、相談フェア」、午後が本総会であった。フェアには、社会保険労務士の吉岡さんが中心になって年金相談、介護と介護用品の相談、仕事づくり、ホームサービスとリフォームのコーナー、薬草の試飲コーナーと多彩で、これに長野の卵と、愛彩豆腐が加わった。ホームサービス事業を企画した安部さんは、「はじめは、入ったらすぐ仕事があると思った。何度か話しているうちにそうでないことが判った」と初めての方にも説明している。家庭に係わる仕事は、介護、給食、住宅改造などがあるが、とりあえずは「仕事をする人」を養成しようと、地域の手わざを残す職人さんを掘りおこし「仕事人講座」を準備中。

仕事づくりには、今までの経験も活用しながら、すぐできる仕事と、高齢協を支える事業も必要と二段がまえですすめている。

一つは「講座事業」で、ホームサービスの他、社会保険労務士受験講座(開講中)、編集コーディネイター養成、ヘルパー講座など。

二つ目は、農と食の事業で、給食はすでに労協が中心だが、新座の施設給食(60食)と深谷の愛彩弁当がはじまっている。食の懇談会も計画したい。農業は、春日部で600坪の土地を借りて畑をつくろうと耕作人を募集中だ。日高では休耕田を活用したいと企画をつくっている。薬剤や遺伝子操作の恐くない「本物食品」を農からはじめたい。

三つ目は、リフォーム(住宅や洋服)や旅行事業で、組織を支える事業をはじめると。